厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
（分担研究報告書）

医療従事者のための障害者対応研修プログラムのE-learning教材の作成に関する研究

研究代表者　八巻知香子　国立がん研究センター　がん対策研究所　室長
研究分担者　打浪　文子　立正大学社会福祉学部　准教授
研究分担者　櫻井　裕幸　日本大学医学部　主任教授
研究分担者　山内智香子　滋賀県立総合病院　がん相談支援センター　センター長
研究分担者　堀之内秀仁　国立がん研究センター中央病院 医長
研究分担者　今橋久美子　国立障害者リハビリテーションセンター研究所　室長
研究分担者　牧尾　麻邑　支援技術開発機構　研究開発・研修主任
研究分担者　高山　亨太　日本社会事業大学　研究員
研究協力者　原田　敦史　堺市立健康福祉プラザ視覚・聴覚障害者センター点字図書館長
研究協力者　皆川　　愛　ギャローデット大学　ろう難聴児レジリエンスセンター研究員
研究協力者　小松　智美　大塚ろう学校　看護師　手話通訳士
研究協力者　平　　英司　国立情報学研究所　コンテンツ科学研究系　特任研究員
研究協力者　飛松　好子　国立障害者リハビリテーションセンター　名誉総長
研究協力者　清野　絵　　国立障害者リハビリテーションセンター研究所　室長
研究協力者　斎藤　崇志　国立障害者リハビリテーションセンター　研究員
研究協力者　關本　翌子　国立がん研究センター中央病院　看護部長
研究協力者　岡村　理　　滋賀県立総合病院　がん相談支援センター　相談員
研究協力者　吉田　優子　日本大学医学部附属病院　がん相談支援センター　看護師
研究協力者　野村　浩明　日大学医学部附属病院　がん相談支援センター　社会福祉士
研究協力者　甲斐　更紗　国立がん研究センター がん対策研究所　特任研究員

障害のある人の受診時に医療機関および医療者に求められる対応内容について、先行研究班を引き継いで作成した研修プログラムを、より多くの医療者が活用できるようにするため、手話、字幕、音声を付与した46分の動画をE-learning教材として作成し、がん医療分野の専門職ならびに障害福祉分野の専門職による評価を行った。

評価の結果、障害者のニーズを伝えるコンテンツとなっていると評価された。

今後は、がん相談支援センター相談員研修として広く提供し、普及をはかるとともに、受講者からのフィードバックを得て必要に応じた改善、充実を重ねていく予定である。

A. 研究目的

障害者の高齢化に伴い、相当数の障害者ががんに罹患していることが推測される。

がん医療を担う医療機関において望ましい対応がなされることを意図して、先行研究班では医療者向け研修プログラムを作成した。各障害の特性や関連する知識の提供を意図した30分版、障害当事者1名の経験談の共有を含めた60分版、各障害に関連する知識の提供と当事者や日常生活を支援する専門職が事例を紹介する120分版の3研修を実施した(20EA1014)。受講者へのアンケートでいずれの版でも障害者のニーズと必要な対応が学べたという評価が得られたため、受講の負荷が最も少ない30分版をE-learning教材として作成し、広く提供することを目的とする。

B. 研究方法

１．プログラム内容

障害者施策の流れや合理的配慮の概念に関する概論、特にコミュニケーションに配慮が必要となる視覚障害、聴覚障害、知的障害それぞれの領域におけるニーズと求められる合理的配慮についての講義で合計46分の講義を構成した。

「概論」については本研究班および先行研究班の研究代表者が担当した。「各障害の特性および関連する知識」では、「視覚障害者の場合」は、視覚障害者支援を専門とする福祉専門職、「聴覚障害の場

合」は、4名のろう医療者およびろう者でがんを経験した当事者によるリレー形式、「知的障害の場合」は、知的障害分野を専門とする福祉分野の研究職が担当した。

テーマ	時間
1　概論（知識）	11分
2　視覚障害の場合（知識）	10分
3　聴覚障害の場合（知識）	12分
4　知的障害の場合(知識)	13分

２．情報アクセシビリティの確保

プログラムのうち、「概論」「視覚障害の場合」「知的障害の場合」は、視聴覚に障害のない講師が担当し、講師本人の声に手話通訳と字幕を挿入した。「聴覚障害の場合」は、4人の講師がリレー形式で手話による解説を行い、手話通訳者による読み取りの声と日本語の字幕を挿入した。

３．研修プログラムの評価

本研究の分担者、協力者が評価に参加した。評価に参加したのは、がん診療連携拠点病院の専門職7名、福祉分野の専門職、研究者8名の合計15名である。職種は両分野とも、医師、看護師、社会福祉士を含む多分野の専門職である。

評価にあたっては、講義のスライド、音声とその音声の逐語録を用いて評価した。がん診療の専門職には、「障害分野に不慣れな医療者が見てもニーズがわかりやすいか」という観点、福祉分野の専門職には「障害者のニーズとその対応方法が適切に解説されているか」という観点での評価を依頼した。評価については、「変更が必須な内容」と、「必須ではないがより改善が可能な助言」に分けて回答することを求めた。

（倫理面への配慮）

本研究の対象は個人ではなく、介入を行わず人体から採取された試料や要配慮個人情報を取得しないため、研究倫理審査を必要とする内容ではない。研修内容の妥当性評価については、本研究の分担者、協力者が研究活動の一環として対応した。

C．研究結果

研修内容の評価

修正が必須として回答されたうち、内容にかかわる点は、「概論において、2011年の法改正について追加の説明を加えるべき」という指摘1点のみであった。その他の指摘は、受け取る人の立場によっては気になる言い回しに対する指摘であった。

必須として指摘された点については、すべて修正したうえで、講義コンテンツを完成させた。

D．考察

先行研究班において3パターンで試行した研修プログラムのうち、知識伝達の部分についてE-learning教材を作成した。がん診療連携拠点病院および障害福祉分野双方の専門職から、必要な内容が適切に反映されていると評価された。

E-learningという媒体の特性上、長時間の講義の視聴が困難であると予想されることから、知識伝達の部分のみに焦点をあて、極力短時間の講義とすることに努めた。しかし、ライブ開催によるオンライン研修へのアンケート結果からは、当事者の経験談が非常に参考になるという感想も多くみられていたことから、各医療施設や医療者教育の場面では、このE-learning教材と地域の当事者の体験談を組み合わせた活用なども考えられるであろう。

E．結論

障害のある患者の受診時に医療機関および医療者に求められる対応内容について、手話、字幕、音声を付与したE-learning教材を作成した。がん医療分野の専門職ならびに障害福祉分野の専門職による評価の結果、障害者のニーズを伝えるコンテンツとなっていると評価された。

（謝辞）

今回の研修プログラムにご協力いただいた、ろう者のがん患者会「がんば聾」の皆川明子様、依田寿美様、中島明子様に記して感謝を申し上げます。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

（発表誌名巻号・頁・発行年等も記入）

１．論文発表

特になし

２．学会発表

八巻知香子, 飛松好子, 原田敦史, 皆川愛, 小松智美, 打浪文子, 甲斐更紗, 羽山慎亮. 障害のある人のニーズを医療者に伝える. ～障害のある人が来院したらシリーズを教材とする研修会の実施とその評価～. ヘルスコミュニケーションウィーク～福島. 2023.9.30-10.1.

H.知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む）

1.特許取

特になし

2.実用新案登録

特になし

3.その他

特になし